充実した人生を送るために
－「論語」を読んでみよう－

開倫塾
塾長　林　明夫

１．はじめに

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただきありがとうございます。

内閣総理大臣が代わり、福田康夫さんになりました。福田総理には、構造改革を断固推し進めていただきたいと希望します。

(１)人間は自然に優しくすることも大事です。栃木県をはじめ日本には森や森林がたくさんあります。国土に占める森林・森の面積の割合は、フィンランドに次いで世界２位の多さです。おそらく、栃木県も、全面積の三分の二くらいは森や林に囲まれていると思います。ところが、その森や林を手入れする人がほとんどおらず、大変な状況になっています。そこで、国や自治体に私がお願いしたいのは、森や林や山を守ることもぜひやっていただきたいということです。それらを守ることを、公共事業としてやることも大事だと思います。

(２)私は、基本的には「小さな政府、小さな自治体」を目指すことが大切と考えますので、「公共事業」は必要最小限にすべきだと確信しています。ただ、森や林を守るための公共事業は「国家百年の計」として、「教育」と同様推し進めるべきと考えます。

(３)昔は、森林で働く人が５０万人くらいいました。しかし、今は５万人を切っているそうです。５万人では、日本中の森林や山を守ることはとてもできません。ですから、昔と同じように５０万人にする、あるいは１００万人にして公共事業としてやっていただければ、日本の自然を守る上でも大いに役に立ち、また、ばらまき行政などといわれることもなくなります。このような形で、価値のある予算の使い方をしていただければありがたいと思います。

２．充実した人生を送るためにー「論語」を読んでみようー

(１)さて、今日は、久しぶりに、孔子の教えといわれる「論語」について少しご紹介させていただきたいと思います。

足利市には、「足利学校」という日本最古の学校があります。足利学校では、儒教がとても盛んに勉強されていたそうです。現在、史跡足利学校のお土産(おみやげ)として「論語抄」、論語をまとめたものが売られています。「論語抄」は、足利学校の研究員で、かつて足利高校で漢文の先生をなさっていた須永美知夫先生がまとめられたものです。わかりやすく、また、読みやすい素晴らしい内容です。私は、その本が大好きで、いつもカバンの中に入れて読ませていただいています。

(２)そこで、今日は皆さんとご一緒に、須永先生の「論語抄」をテキストにして論語を勉強してみたいと思います。

①論語には、「子曰（しい）わく、（子曰わくとは、孔子が言ったという意味です）学びて時に之（こ）れを習（なら）う、亦（ま）た説（よろこ）ばしからずや。（学問をして、その学んだところを復習できる機会を逃がさずに、何回も何回も繰り返し復習すると、学んだところのものは、自分の真の知識として完全に消化され、体得される。これはまた、なんと喜ばしいことではないか。）」という出だしがあります。

②次に、「朋有（ともあ）り遠方より来(きた)る、亦た楽（たの）しからずや。」とあります。これは、文字の上では「友達がいて遠くから来た。これは本当にうれしい。」という意味ですが、「このようにして、知識が豊かになれば、道を同じくする友達が遠い所からまでもやって来て、学問について話し合うようになる。これはまた、なんと楽しいことではないか。」という意味があります。

③さらに、「人知（ひとし）らずして慍（いきどお）らず、亦た君子（くんし）ならずや。」と続きます。これが大事です。「いくら勉強しても、この自分を認めてくれない人間が世の中にはいるものだ。そういう人がいたとしても、慍らず（怨むことはないよ）。それでこそ、学問も徳も共にすぐれた君子ではないか。」という意味です。

　これらも、すばらしい文章ですね。

④そのあとには、「子曰く、巧言令色（こうげんれいしょく）鮮（すくな）きかな仁（じん）。」という、とても有名なことばが続きます。「巧言」とは巧（たく）みに言葉を飾るということで、「令色」とは巧みに顔色をとりつくろうということです。このような人物には、「鮮きかな仁、ほとんど仁（人間愛）の道はないといってもよい。」という意味です。つまり、言葉を飾ったり、顔色をとりつくろったりしないほうがよいということを、孔子は教えてくれているわけです。

⑤このほかにもすばらしい文章がたくさんあります。その中でも私が好きなのは、「子曰く、吾十有五（われじゅうゆうご）にして学（がく）に志（こころざ）す（孔子は言いました。私は15歳で学問に志しました）。三十にして立つ（30歳で、思想も見識・ものの見方も確立しました）。四十（しじゅう）にして惑（まど）わず（40 歳で、心の惑いもなくなりました）。五十にして天命（てんめい）を知る（50 歳で、天から与えられた自分の使命・ミッションを自覚しました）。六十にして耳順（みみしたが）う（60 歳で、何を聞いても耳にさからうことがなくなりました）。七十(しちじゅう)にして心の欲（ほっ）する所に従えども、矩（のり）を踰（こ）えず（７０歳になると、自分の欲望のままに振る舞っても、その行動が道徳からはずれることはありませんでした）。」という文章です。

３．おわりに

　私は論語が大好きで、時々読んでおります。皆様もぜひ論語に親しんでいただき、論語を友達にして、いつもいつも読んでいただきたいと思います。そうすると、充実した人生が送れると思いますので、今日はその一節を紹介させていただきました。

－ 2008 年 11 月 20 日加筆－